View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Hiroshima University Institutional Repository

ヘンリー・ヴォーンと17世紀神秘主義思想

松本　舞

ヘンリー・ヴォーン（Henry Vaughan, 1621–1695）の詩集『火花散る火打ち石』（*Silex Scintillans*, 1650, 1655）の冒頭に付されたエンブレムは，神の手が握る雷に打たれ，血と涙を流す，罪深き詩人の心を表している。それは，神に拠って命が与えられる瞬間を，更にマクロコスモスのレベルで解釈を拡大すれば，神による天地創造を意味すると考えられてきた。更に，'*silex*'とはラテン語で「火打ち石」を意味するため，批評家たちは，このエンブレムに錬金術的な意味を見出していた。[1] そして，これまでの研究において，ヴォーンと神秘主義思想の関係が示され，彼の詩的表現の中にも錬金術の用語が用いられていることが既に指摘されてきた。しかしながら，その指摘は語の類似性にとどまることが多い。[2] 本論は，ヴォーンの表現を神秘主義，そして特にその一分野である錬金術の理論と照らし合わせることで，それが政治批判をも内包するという新たな視点を示す試みである。

ヴォーンは「聖文」（'H. Scriptures'）と題された詩の中で聖書と錬金術を次のように結び付けて描いている。

> In thee the hidden stone, the *Manna* lies,
> Thou art the great *Elixir*, rare, and Choice;
> The Key that opens to all Mysteries,
> The *Word* in Characters, God in the *Voice*.
>
> ('H. Scriptures', ll. 5–8)[3]

引用箇所の下線部はすべて筆者による。また，本稿において，文献中の long 's' 表記はすべて現代英語表記にて引用し，出版社不明の文献に関しては出版年のみを記載する。

[1] エンブレム解釈については，松本（2013）81–82頁及び Pettet, p. 71, Dickson, pp. 124–149を参照。

[2] ヴォーンの表現と錬金術のイメージの重なりについては，松本（2013）82頁及び Holmes, pp. 52–53, Pettet, p. 72, Calhoun, p. 105, 110–111, Rudrum, p. 474, 479, Linden, pp. 227–246を参照。

[3] ヴォーンの詩は，*The Works of Henry Vaughan*, ed. L. C. Martin, 2nd ed.（Oxford: Clarendon, 1957）を定本として用い，以下 Martin と記載する。また，注釈に関しては，これに加えて *The Complete Poems,* ed. Alan Rudrum（Harmondsworth: Penguin, 1977）を参考にし，以下 Rudrum と記載する。また，トマス・ヴォーンの著作は Thomas Vaughan, *The Works of Thomas Vaughan*, ed. Arthur Edward Waite（London: The Theosophical Publishing House, 1919）により，以下 *Works* と表記する。

詩人は，聖文の中に「抜粋された天国」（‘Heav’n extracted’, l. 2）があるともいうが，‘extract’は錬金術でいうところの精髄を「抽出する」意を伴っており，ここには，天国が「抽出される」という錬金術のイメージが追加されている。この詩の中でヴォーンは，聖書の中の神の言葉を「隠された石」「マナ」そして「偉大なるエリクシル」と言い換えている。ここでヴォーンが意図している「隠された石」とは賢者の石のことである。聖書の中の言葉，即ち神の言葉こそが，錬金術によって取り出された第五元素であり，それが「すべての神秘」を解く鍵である，と詩人は錬金術の文脈で表現している。ヴォーンは物質的には紙とインクでできているにすぎない聖書に一種の錬金術を施し，神の声という第五元素を取り出そうと試みているのではないかと考えられる。

ヴォーンが神の声を取り出そうと試みた背景には，英国17世紀，内乱時の政治的宗教的混乱の中で，真の聖書の教義がまげられ，詩人は神との対話を奪われた，と考えていたことがある。その様子は，神の教えがその「味」や「色」の点で汚染されていくだけはなく，宗教自体の音が「偽りの反響」を増幅させていく様子としても描かれている（‘Religion’, ll. 36–38）。また詩人は，「おまえの言うコモンウェルスも栄光も自分の話に詰め込むつもりはない」（‘I’ll not stuff my story / With your Commonwealth and glory’, ‘The Proffer’, ll. 35–36）と言い，ヴォーンを金銭的に誘惑する，急進派清教徒の人々の声に対する抵抗も表している。[4]

宗教的堕落をもたらす声が，一種の騒音であり，かつ分裂した，複数の音として描かれている一方で，神へ訴える声は「一つの絶え間ない声」（‘one strong incessant cry’, ‘Abel’s Blood’, l. 21）もしくは「ひとつの，鋭く長い叫び」（‘a shrill and long cry’, ‘Abel’s Blood’, l. 9）と表される。その声はまさに「単一」（‘single’, ‘Abel’s Blood’, l. 7）の声であるが故に，神の耳へと届くと詩人は考えているように思われる。また，神や天使の神聖な声は，ヴォーンの詩的表現においては，神の「やさしく呼ぶ声」（ ‘[God’s] soft call’, ‘The Night’, l. 33）や「天使の声」（‘Angel’s voice’, ‘The Night’, l. 39）など単数の声として表現されている。ヴォーンにとって，‘single’や ‘one’といった「ひとつ」の声を探求することは，神聖な声を得るための手段でもあったと考えられるのである。

ヴォーンが描く音，特に自然界の声の中にも，神秘主義思想の理論が背後にあったことは明記しておかなければならない。例えば，詩人は「調和の神」（‘the God of Harmony’, ‘Church-Service’, l. 1）を賛美しながら，「石と塵と私のすべてが / あなたに叫ぶために一緒に声を合わせる」（‘stones, and dust, and all of me / Joyntly agree / To cry to thee’, ‘Church-Service’, ll. 17–19）ことを願っている。

[4] 松本（2009）26–30頁を参照。

そしてヴォーンは上へと昇ってゆく風や落ちてくる泉といった循環を「賛美する循環」（‘*Hymning Circulations*’, ‘The Morning-watch’, l）と讃え，被造物たちがみな秩序だって讃美歌を歌う声を「偉大なるチャイムと自然のシンフォニー」（‘great *Chime* / And *Symphony* of nature’, ‘The Morning-watch’, ll. 11–12）と表現している。これはヤコブ・ベーメ（Jacob Behmen, 1575–1624）が次のように論じている，神秘主義思想を基本としたものと考えられる。

[...] the Divine voice or sound ariseth up in all Creatures in great joyfulness; [...] the spirit proceeding from the Divine Voyce maketh a joyfulness, [...] the creature is in an Image as a Joyful Harmony, wherewith the Eternal Spirit playeth, or melodizeth.

（Behmen, *Signatura Rerum*, p. 194）

このような神秘主義の音楽は，自然と祈りの調和の音としてヴォーンによって賛美されている。

Prayer is
The world in tune,
A spirit-voyce,
And vocal joys
Whose *Eccho* is heav'ns blisse.（‘The Morning-watch’, ll. 18–22）

ヴォーンが描く「自然のシンフォニー」は神と自然，そして被造物としてのヴォーン自身が一体となり，調和した，一つの音楽なのである。詩人が神の声を享受するためには，他の被造物たちの声と祈りの声を融合する必要があり，そして，それこそが神秘主義思想の理論を基本とした神の音楽であり，内乱期に清教徒たちがかまびすしく作り出していた騒音や不協和音と対極をなす音なのである。

ヴォーンは時に，「自分は石か木であればよかったのに」（‘I would I were a stone, or tree’, ‘And do they so?’, l. 11）と述べており，被造物との同化願望を表明しているが，この背後にあるのは，万物にあまねく内在する霊性を主張するヘルメス思想であると思われる。ヴォーンにとって，「石」もまた「自身の友である被造物たち」（‘My fellow-creatures’, ‘The day of Judgement’, l. 14）と同格に並べられる存在であり，彼らも自由を求めて神に訴えかけていると言う。ヴォーンはしばしば「神と被造物との霊的交渉」（‘commerce kept between / God and his Creatures’, ‘The Stone’, ll. 20–21）を見出しているが，神が与える「霊」は人間にとどまらず，石にも及ぶという特殊な概念はトマス・ヴォーン（Thomas

Vaughan, 1621-1666）が次のように論じたことと共通する。

> [...] spirit is in man, in beasts, in vegetables, in minerals; and in everything it is the mediate cause of composition and multiplication. [...] I affirm this spirit to be in minerals.（Thomas Vaughan, *Works*, p. 41）

さらに兄ヘンリーは，「死んでいると考える人たちもいるが，その石たちが / 証拠立てる声を一つにして，みな一斉に / あの秘密の罪を明るみに出す」（'stones / Which some think dead, shall all at once / With one attesting voice detect / Those secret sins', 'The Stone', ll. 37-45）と言って，石が罪を暴く力を持っていることを強調している。もちろん政治的，宗教的な文脈の中で考えれば，ヴォーンの「石たち」が糾弾する罪とは清教徒たちのそれである。あくまで人間が上位であり，その下位に自然が存在するという考えが支配的な中で，ヴォーンの神秘主義的な自然観は，神の下での被造物すべての平等を示唆する。それは，クロムウェルたちが目標とした人間世界のコモンウェルス，そして「水平派」ら（'the Levellers'）が求めた政治的な平等を神の視点から上書きするかのような主張である。

ヴォーンが描く神学的な最後の審判も終末に世界が滅び，浄化される一種の錬金術として読むことができる。詩人は終末をむかえる際に，その変成が被造物の各々すべてに及ぶことを強調しつつ，一種のガラス化が起こると考えている。「跋」の詩の中では，最後の審判の際の被造物が次のように描写されている。

> And through thy creatures pierce and pass
> Till all becomes thy cloudless glass,
> Transparent as the purest day
> .....
> A state for which thy creatures all
> Travel and groan, and look and call.
>
> （'L'Envoy', ll. 11-13, 20-21）

詩人は，最後の審判の際にすべての被造物たちが清められ，「最も純粋な日の光のように透明」で，かつ「曇りなきガラス」になることを願っている。このガラス化は，堕落前の自然が，本来「透明な」状態であったという理論に由来する。ベーメは次のように論じている。

> [...] Nature was very rarified and thin or Transparent, and all stood merely in power, and was in a very pleasant lovely Temper.
>
> (Behmen, *Aurora*, p. 387)

そして堕落前の人間アダムも，以下にあるように，楽園の中においては「透明な」状態であった。

> [...] in Paradise there is a perfect life without any shadow of change, [...], where the Paradisieal man is clear as a transparent glass, in whom the Divine Sun shineth through and through, as Gold that is thoroughly bright and pure, without any spot or foulness. (Behmen, *Signatura Rerum*, p. 126)

注目すべきことは，ヴォーンの「跋」（'L'Envoy'）において，詩人が，人間と自然はともに「透明化」することによってはじめて楽園へと回帰できると考えていることである。即ち，終末のガラス化は人間を堕落前の「透明な」人間の状態に戻すだけではなく，自然を堕落から救済する，錬金術工程なのである。

ヴォーンの神秘主義的な表現が示唆するような，錬金術師としての神，もしくはキリストの力による世界の「変容」（'transmutation', Thomas, *Works*, p. 302）ではなく，内乱期の清教徒やその他のセクト集団を始めとする一派は，差し迫った社会変革，福千年思想における楽園建設を目指して宗教的熱心さの度合いを高めていた。クウェーカー教徒に代表される急進派の清教徒たちは，聖霊を通して神からの啓示を受けて革命を押し進めていると主張しており，彼ら自身はその「熱心さ」（'zeal'）を自負していたが，その盲目的な熱狂ぶりは，王党派の人々からは批判の対象となった。ヴォーンも清教徒たちが「熱狂を叫び」（'crying, zeal', 'The Constellation', l. 40），騒音を作り出していることをしばしば詩の中で暗示している。

清教徒の宗教的熱狂は，熱すぎる火の「熱」としても王党派の人々の非難の対象となったように思われる。例えば，ヴォーンと同じく王党派の立場を取った，エイブラハム・カウリー（Abraham Cowley, 1618–1667）は，次のように木陰を讃えている。

> Oh, blessed shades! O gentle, cool retreat
> From all th'immoderate heat,
> In which the frantic world does burn and sweat!
>
> ('The Garden', ll. 45–47)

ここでカウリーは「祝福された木陰」，即ち神の御心が働く木陰を「すべての過剰な熱からの / やさしき，涼しい後退 / 隠棲の場所」と言い換えている。また，‘frantic’は「精神の病に侵された状態」（*OED* 1. ‘Affected with mental disease, lunatic, insane; in later use, violently or ragingly mad’）を含意し，病的なイメージがある。ここでの「過剰な熱」を清教徒の熱狂の比喩ととらえると，カウリーを始め，ヴォーンなどの王党派の人々が自然の中に「後退 / 隠遁」し，「隠れ家」を求めたのは，清教徒の熱狂主義，即ち ‘zeal’ の過剰な熱から逃れる避難場所として自然をとらえていたと考えることが出来る。興味深いことに，17世紀中葉の政治的，宗教的文脈の中での，清教徒のこの過激な熱心さと同様に，神秘主義思想，特に錬金術の中でも，過度な，誤った熱は，しばしば注意して排除すべきものとして説明されている。ヴォーンも「宗教」（‘Religion’）や「ユダヤ人」（‘The Jews’）と題された詩の中で，木陰の中に神や天使を，ひいては旧約聖書の時代を描いている。木陰そのものは，単に涼しい場所としての描写にとどまらず，病的な清教徒の熱狂の熱から逃れる場所が必要であったことを暗示していると考えられる。

その一方で，ヴォーンは神の光と熱が聖なるものであることを，以下のように示している。

> O <u>thou immortal light and heat!</u>
> ……
> [. . .] brush me with <u>thy light</u>, that <u>I</u>
> <u>May shine unto a perfect day</u> [.]
>
> （‘Cock-Crowing’, ll. 19, 46–47）

ここでヴォーンは最後の審判の際の「あの完全なる日の光」に向かって輝けるよう，「不滅の光と熱」を求めている。神の熱は次のように描写されてもいる。

> [. . .] Thou art
> Refining fire, O then refine my heart,
> My foul, foul heart! Thou art <u>immortall heat,</u>
> Heat motion gives; Then warm it, till it beat [.]
>
> （‘Love-sick’, ll. 12–15）

詩人は，このような聖なる光と「温める」熱とは対照的な，即ち，邪悪な光と過激な熱がこの世に蔓延っていることを逆説的に描き出していると考えられる。

ヴォーンがいうところの「不死の熱」とは，例えばトマス・ヴォーンが「賢者の炎」（‘the philosopher’s Fire’, Thomas Vaughan, *Works*, p. 280）もしくは「秘密の炎」（‘Secret Fire’, *Ibid*. p. 278）と呼んだ，「第一資料」から万物が生み出された際に必要であった穏やかなる火と同質のものである。また，トマスは，何かを「発生させる」（‘inbreeding’）熱と「発生源とならない」（‘in-breeding’），むしろ破壊的な熱とを区別することが出来ない偽錬金術師を「フクロウ」（‘owl’）として表現している（Thomas Vaughan, *Works*, p. 279）。トマスの表現はリチャード・クロムウェル（Richard Cromwell, 1626–1659, 在位1658–1659）がその愚かさをフクロウとして揶揄されたことも想起させる。兄ヘンリーは「鳥」（‘The Bird’）と題された詩の中で，朝の光の中でさえずる「光の鳥たち」（‘these Birds of light’, l. 23）と，フクロウをはじめとする，闇を支配する陰鬱な鳥たちを対照的に描き，後者が「楽しき国」（‘pleasant Land’, l. 30）であった英国を「硫黄」（‘brimstone’, l. 30）の国へ変化させてしまった原因を，偽錬金術師としての清教徒がもたらす，破壊的な過度の熱の中に見出しているように思われる。換言すれば，清教徒の破壊的な「熱狂」（‘zeal’）は，生成の熱と破壊的な熱を区別できないフクロウのイメージを媒介にして，生成のための熱を判別できない，偽りの錬金術を表すものとして解釈され得るのである。事実，平和を作り出すはずの国王は，「粗野な，破壊を行う手」（‘violent, destroying hands’, Thomas Vaughan, *Works*, p. 233）である急進派の清教徒によって処刑されてしまう。トマスの錬金術に関する表現の中では，「本来の性質を過ぎる熱」（‘the heat [which] exceeds the natural proportion’, Thomas Vaughan, *Works*, p. 233）が，清教徒たちの「熱狂」（‘zeal’）をも強く暗示するように思われるのである。ヴォーン兄弟にとって，終末の地上に天国を作り出すための清教徒革命は，過度の熱を使って黄金を生成しようと試みる，偽りの錬金術と重ねられ，彼らは，その表現の中に政治的な抵抗を試みていると考えられる。実践的錬金術における，この穏やかなる火の重要性はヤコブ・ベーメによっても論じられており，ベーメの論文の中では，穏やかなる火が「神の光」に喩えられている。

> [. . .] it must be a middle or mild fire, to keep the spirit in the Heart from rising, it must be gently *Simpring*, [. . .] and continually rejoyceth, *as if* it should now be kindled again in the Light of God.
>
> （Behmen, *Aurora*, p. 535）

これらのことを併せて考えると，ヴォーンが「白い日曜日」（‘White Sunday’）と題された詩の中で，「神の火」（‘thy [=God’s] fire’, l. 61）によって洗練してほし

いと願い，逆に熱心な信者の破滅を恐れ，「あなたの星を / 滓へと溶かしてしまわないでください」（'Let not thy stars [. . .] / Dissolve into the common dross!', ll. 63–64）と叫んでいるのは，ヴォーンの周りで蔓延っているのが，過剰すぎる熱であり，それは急進派清教徒の「熱狂」の熱であることが暗示されていると言えるのである。

清教徒たちは，この「熱心さ」（'zeal'）を重要視するとともに，その霊感を，神から受けた「新しい光」（'New Light'）と自負していた。しかしヴォーンはこの「新しい光」（'new light', 'White Sunday', l. 9）が聖霊の光でありえようか，と疑問を呈し，「夜」と題された詩の中では，それを「過ちに導いてゆく光」（'ill-guiding light', 'The Night', ll. 45–48）とさえ表現している。その光は，偽の錬金術師である清教徒たちによる過度の熱を持った，「金メッキされた光」（'a gilded beam', 'The Nativity', l. 32）であると批判されている。

一方で，ヴォーンが神に求める「光」もしくはその「輝き」とは，堕落前の世界において，自然と人間の中に神から与えられていた光の輝きであり，それは偽の錬金術師である清教徒によって金メッキされた「新しい光」とは対照的な光である。神秘主義思想の文献においては，人間には本来神の光が宿っていると考えられており，例えば，パラケルススは次のように論じている。

> [. . .] divine Celestial hidden Light in man; the which [. . .] doth not come into a man from without, but rather proceeds from within, outwards
>
> （Paracelsus, *The Water-Stone of the Wise men*, p.155）

この光の輝きは，ヴォーンが幼年時代に感じていた光でもある。ヴォーンは，「前進」しようとする清教徒的な価値観に対する抵抗を表現しながら，次のように述べている。

> [. . .] I
> Shin'd in my Angell-infacy.
> …….
> But felt through all this fleshly dresse
> Bright *shootes* of everlastingnesse.
>
> （'The Retreat', ll. 1–2, 19–20）

従って，神にもう一度接近するために「永遠の若枝のような輝いた光のすじ」を回復しようとするヴォーン叫びは，光を偽装する清教徒に対する批判となる。

Lord! grant some *Light* to us, that we
May with them find the way to thee.
…….
And say once more, *Let there be Light.*

（'The Nativity', ll. 35-36, 40）

破壊する火，熱すぎる熱，金メッキされた光をともなう清教徒の錬金術が偽の錬金術である一方で，ヴォーンは神の錬金術を以下のように描いている。

[. . .] by that means
We, who are nothing but foul clay,
Shal be fine gold, which thou didst cleanse.

O come! refine us with thy fire!
Refine us! we are at a loss.
Let not thy stars for Balaams hire
Dissolve into the common dross!

（'White Sunday', ll. 57-64）

ここでヴォーンは「純粋な金」になりたいと願っている。錬金術の工程において，最終的に「黄金」が取り出される際には，「滓」（'dross'）がランビキの中に沈殿することになり，ヴォーンの表現もまた，錬金術における分離過程を利用したものであると言える。ヴォーンは「滓」と「黄金」（'gold'）を分離しているだけではない。ここでの「星」は神の真の信者に，反対に清教徒たちが「滓」に，喩えられて対比されているのである。ここでの詩人の叫びは，錬金術工程の結果として，彼の政治上の敵の末路のように下位に沈殿した「滓」（'dross'）となってしまわないように，逆に，神による錬金術によって，自身を信仰において下位の存在から上位の存在へと上昇させて欲しい，という願いでもある。

この願いは，「火打ち石」に喩えられたヴォーンの頑なな心が，神の力によってもう一度火を起こし，火花を散らせたいと願う以下の叫びの中にも表されている。

[. . .] If I must
Be broke again, for flints will give no fire
Without a steel, O let thy power clear

Thy gist once more, and grind this flint to dust!

（'The Tempest', ll. 57-60）

ヴォーンにとって，真の錬金術師はあくまで神であるが，詩人ヘンリーと同様に，錬金術師である弟，トマスも次のように，自らの心を「火打ち石」に重ね，神の錬金術（'Art'）を受けようとする。

My God, my heart is so;
'Tis all of flint, and no
Extract of tears will yield.
Dissolve it with Thy fire,
That something may aspire,
And grow up in my field.

Bare tears I'll not entreat,
But let Thy Spirit's seat
Upon those water be;
Then I — new form'd with light —
Shall move without all night
Or eccentricity.

（Thomas Vaughan, *Works,* p. 32）

トマスは，神の炎で溶かされることによって，スピリッツや魂を想起させる「何か」が上昇すると考えている。そして彼は，おそらくは天地創造の時の光と最後の審判の時の光を同時に想起させながら，神の「光」の中で自らが新たに形作られると言う。トマスとヘンリーが自身の心を「火打ち石」に同化し，その火花を散らせようと試みるのは，17世紀中葉の政治的，宗教的文脈の中では，「固く頑ななこの世の火打ち石」（'hard, stubborn flints of this world', Thomas Vaughan, *Works*, p. 302）である人間が，他の被造物たちとともに，神の錬金術を受けることによって，堕落前の世界へと変貌を遂げることを彼らが願っているためである。

ヘンリー・ヴォーンの詩的錬金術によって取り出された秘薬としての言葉は，幼年時代へと帰ってゆくための若返りの薬であっただけではなく，清教徒の「熱狂」を攻撃し，被造物を堕落から救済し，ヴォーン自身が最後の審判の際に被造物である石と共に神の錬金術による変容を受け，堕落前の黄金の世界へと帰ってゆくためのエリクシルだったのである。

広島大学

参考文献

一次資料

Behmen, Jacob. *XL. Questions Concerning the Soule*. London, 1620.

---. *Signatura Rerum*, London, 1651.

---. *Aurora, that is, the Day-spring, or Dawing of the Day in the Orient, or Morning Rednesse in the Rising Sun*. 1655.

Cowley, Abraham, *The Poetical Works of Abraham Cowley, Vol 1*. Edinburg, 1777.

---. *The Collected Works of Abraham Cowley, Volume 1: Poetical Blossomes, The Puritans Lecture, The Puritan and the Papist, The Civil War*. Ed. Thomas O Calhoun, Newark: U of Delware P, 1989.

The Holy Bible: Kings James Version. Oxford, OUP, 1996.

Paracelsus, Theophrastus. *The Secrets of Physick and Philosophy*, London, 1633.

---. *The Occult Causes of Disease. Being a Compendium of the Teachings Laid Down in His "Volumen Paramirum"*. Translated by R. Turner, London, 1655.

---. *Paracelsus of the Supreme Mysteries Nature*. Ed. R. Turner, London, 1655.

---. *Philosophy to the Athenians*. Translated by H. Pinnel, London, 1657.

---. *Paracelsus his Aurora & Treasure of the Philosophers… Faithfully Englished And published by W. D*. London, 1659.

---. *Paracelsus His Archidoxes Comprised in Ten Books. Faithfully and Plainly Englished, and Published by J. H. Oxon*. London, 1660.

Vaughan, Henry. *A Sermon Preached*. London, 1644.

---. *Silex Scintillans*. London, 1650, 1655

---. *Mount of Olieves: Or Solitary Devotions*. London, 1652.

---. *The Works of Henry Vaughan*. 2 nd ed. Ed. L. C. Martin. Oxford: Clarendon Press, 1957.

---. *The Complete Poems*. Ed. Alan Rudrum. Harmondsworth: Penguin, 1977.

Vaughan, Thomas. *Anthroposohia Theomagica*. London, 1650.

---. *Lumen de Lumine, or A new Magicall Light*. London, 1651.

---. *Magia Admica*. London, 1651.

---. *The Fame and Confession of the Fraternity of R: C*. London, 1651.

---. *The Marrow of Alchemy*. London, 1654.

---. *Euphrates, or the Water of the East*. London, 1655.
---. *The Works of Thomas Vaughan*. Ed. Arthur Edward Waite, 1919.

二次資料

Calhoun, Thomas O. *Henry Vaughan, the Achievement of Silex Scintillans*. New Jersey: Associated U P, 1981.
Davies, Steive. *Henry Vaughan*. Brudgend: Poetry Wales P, 1995.
Dickson, D, R. *The Fountain of Living Waters: The Typology of the Waters of Life in Herbert, Vaughan, and Traherne*. Colombia: U of Missouri P, 1987.
Durr, R. A. *On the Mystical Poetry of Henry Vaughan*. Cambridge, Mass: Harvard U P, 1962.
Hutchinson, F. E. *Henry Vaughan*. Oxford: Clarendon, 1947.
Holmes, Elizabeth. *Henry Vaughan and the Hermetic Philosophy*. Oxford: Blackwell, 1932.
The Holy Bible: Kings James Version. Oxford, OUP, 1996.
Itrat-Husain. *The Mystical Element in the Metaphysical Poets of the Seventeenth Century*. New York: Niblo and Tannen, 1966.
Linden, S. J. *Darke Hierogliphicks*. Lexington: Kentucky UP, 1996.
---. *Mystical Metal of Gold*. New York: AMS, 2007.
Lyndy, Abraham. *Marvell&Alchemy*. Aldershot: Scholar Press. 1990.
Maxwell-Stuart. P. G. *The Chemical Choir*. London: Continuum, 2008
Mendelsohn, Andrew. 'Alchemy and Politics in England 1649-1665', *Past and Present* 135, 1992, 30-78
The Oxford English Dictionary. Oxford, OUP, 1996.
Pettet, E. C. *Of Paradise and Light*. Cambridge: Cambridge UP, 1960.
Post, Jonathan. *The Unfolding Vision*. Princeton: Princeton UP, 1982.
Rattansi, P. M. 'Paracelsus and the Puritan Revolution' *Ambix* II. 1963.
Rudrum, Alan. 'The Influence of Alchemy in the Poems of Henry Vaughan'. *Philological Quarterly*, XLIX 4, 1970. 469-480.
---. "'These fragments I have shored against my ruins": Henry Vaughan, Alchemical Philosophy, and the Great Rebelion' *Mystical Metal of Gold*. Ed. Stanton J. Linden. Brooklyn: AMS, 2007. 325-338.
Simmonds, J. D. *Masques of God*. Pittsburgh: U of Pittsburgh, 1972.
Sullivan, Garret A. *Sleep, Romance and Human Embodiment*. Cambridge: CUP, 2002.

West, Phillip. *Henry Vaughan's Silex Scintillans: Scripture Uses*. Oxford: OUP, 2001.

Yoshinaka, Takashi. *Marvell's Ambivalence: Religion and the Politics of Imagination in Mid-Seventeenth Century England*. Cambridge: Brewer, 2011.

日本語文献

ヴォーン，ヘンリー『ヘンリー・ヴォーン詩集』　吉中孝志訳，広島大学出版会，2006年。

松本舞「清教徒的メランコリーへの処方箋ーヘンリー・ヴォーンの「声」に関する考察」『英文学研究　支部統合号第Ⅱ号』日本英文学会, 2009年, 23-34頁。

---.「ヘンリー・ヴォーンと賢者の石」『英文学研究　支部統合号　第Ⅳ号』日本英文学会，2011年，13-20頁。

---.「初期近代英詩における錬金術（前編）」『島根大学教育学部紀要　第47巻（人文・社会科学）』2013年，81-88頁。

---.「初期近代英詩における錬金術（中編）」『島根大学教育学部紀要　第48巻（人文・社会科学』2014年，55-63頁。

---.『ヘンリー・ヴォーンと賢者の石』金星堂，2016年。

吉中孝志「終末の錬金術ーヴォーンとマーヴェルー」『十七世紀英文学を歴史的に読む』　十七世紀英文学会編，金星堂，2015年。

Henry Vaughan and Seventeenth-Century Mysticism

Mai Matsumoto

This paper deals with the relationship between Vaughan's mysticism and the religio-political situation in his time. He finds a spiritual groan in stones and a 'busy commerce' between creatures and God. Moreover, he regards stones as 'my fellow-creatures' and thinks that they will be delivered from bondage at the last judgement. Vaughan often tries to hear God's voice. The poet complains that his conversation with God cannot be maintained because the doctrine of the Holy Bible has been perverted by the fallen 'zeal' of Puritans in the confusion of the Civil War. He tries to unite his voice and the voice of Nature, and to create a 'Symphony of Nature'. This idea is based on Jacob Behmen's theory that God's voice or the Divine sound of Nature arises from all creatures in great joyfulness, and restores 'a Joyful Harmony', wherewith the Eternal Spirit plays, or melodizes. Hermetic theory of music also helps Vaughan to describe the voices of Nature. And Vaughan's attempt to gain a single united voice, which is often manifested in his mystical expressions, is the way to obtain the holy voice of God.

Moreover, in Vaughan's poems, Puritan zeal seems to be condemned as the excessive heat of fire, which destroys all things in the alchemical process. Thomas and Henry Vaughan describe a Puritan as an owl, a kind of false alchemist, who cannot distinguish between a generating, good heat and a devastating, bad one. In addition, the poet describes the Puritans' 'New light' as merely a 'guilded beam' in the process of false alchemy. These alchemical expressions can be read as the poet's attempt to resist the zeal of contemporary Puritans. Vaughan tries to transform the 'hard, stubborn flints of this world' to gold by God's Alchemy.

Hiroshima University